

## 全関ジムカーナグランプリレポート

本校は、優勝した昨年と同様、エンジンをホンダ・インテグラ typeR の B18C に換装したホンダ・シビック EG6 で2連覇を狙い、参戦しました。足回りのブッシュを打ち換えピロ化し、リフレッシュした車両が完成し、順調に仕上がっていきましたが、大会2週間前の練習会中にまさかのミッションブローを喫し、急遽ミッションを載せ替えることとなりました。その後、部員の懸命な整備により、EG は無事復活し、なんとか大会に間に合わせる事ができました。

大会は、1校当たり3人が午前、午後それぞれ1本ずつ走行し、そのベストタイムの合計で順位が決定されます。出走順は前年度の成績で決まるシステムをとっており、昨年この競技で優勝した当部は最後の出走となりました。



無事復活した EG6

さて、大会当日はあいにくの雨模様となりました。試合会場となった富士スピードウェイのジムカーナ場は、ウェットコンディションになると非常に滑りやすくなり、各校の車両はセッティングに苦しめられます。早稲田の車両もセッティングの変更を余儀なくされましたが、練習会でウェットコンディションのことが多かったことも幸いし、比較的安定した車両に仕上げることが出来ました。

本校の1走者目は主将の早川です。しかし、気負いすぎたのか一つ目のパイロンでオーバーランをしてしまいます。その後も立て直すことが出来ず、ミスコースをしかけるなどで、1分13秒37というタイムになってしまいます。しかし、他校の選手たちも慣れない雨や、プレッシャーからか、ミスをする選手が目立ち、結果的には致命傷とはなりませんでした。

2走者目は3年生でジムカーナ初出場の遠藤です。パイロンから離れてしまう場面が散見されましたが、大きなミスはなく、1分8秒09とまずまずのタイムを残します。



ここでアクシデントが起こります。法政の3走者目が走っている途中にミッションブローしてしまいました。牽引すら困難な状況になり、4トントラックで牽引されていきました。路面にはオイルが散乱し、非常に滑りやすい路面へ

変わってしまいます。

そのような状況の下、3走者目で4年生の今村の出番がやってきます。今回は初選手ながら最終走者という重役を任されました。その期待に見事応え、1分5秒95という好タイムを残します。

しかし、午前を終えた時点で団体順位4位、という厳しい結果となります。

ここで昼休みとなりますが、選手たちに休みという文字はありません。車載動画や、丘から撮ったコースの動画を見て、自分の走りを復習し、改善点を見つけ出します。



動画を見て研究します

さて、午後1走目がやってきます。早川がリベンジを果たし、1分6秒52にタイムアップします。これで早稲田は暫定3番手に浮上します。しかし、他校の選手達も軒並みタイムアップし、かつ雨が止み、路面が乾いてきたため、第2走者、第3走者の遠藤、今村もさらにタイムアップをしなければなりません。

2走目は遠藤です。果敢に攻め、無駄の無い走りで見事1分3秒67を出します。動画研究の成果が表れ、暫定トップタイムを叩き出し、早稲田は団体暫定トップに立ち、部員一同から歓喜の声が上がります。しかし、簡単に勝てるほど全関戦は甘くありません。「まだ勝ったわけではないぞ」と、監督から檄を受け、再び気を引き締めなおします。

その後、東北大学の3走者目が1分2秒67という好タイムを出し、東北大学に団体トップを譲ってしまいます。団体3位につけていた慶応大学は、最終走者がパイロンタッチを犯し、タイムアップできませんでした。

これで、東北大と早稲田の一騎打ちとなります。早稲田の最終走者今村が、1分4秒台を出せば、早稲田の逆転優勝です。このプレッシャーのかかる場面で、今村は見事1分3秒23というタイムを残し、早稲田大学は見事団体優勝を果たしました。選手達は感激の余り、涙を流して喜びました。



優勝が決まり、歓喜しました

また、個人においても、今村が3位、遠藤が5位を獲得し、早稲田にとって実りある大会となりました。